

5. SR 精神および行動の障害 (F20 統合失調症)

文献

Broderick J, et al : Yoga versus standard care for schizophrenia.

Cochrane Database Syst Rev. 2015 oct 21;(10):CD010554. PubMed ID:26488850

1. 背景

ヨガはインド発祥の古くからある精神的修練法であり、現在はリラクゼーションやエクササイズとして西洋でも受け入れられている。統合失調症患者に対する標準的な治療に加えて、ヨガの有効性についての評価が注目されている。

2. 目的

統合失調症患者に対するヨガの補助的療法としての有効性について検討を行う。

3. 検索法

Cochrane Schizophrenia Group Trial Register (2012年11月～2015年1月29日) の検索。

および、定期的にMEDLINE、PubMedの、EMBASE、CINAHL、BIOSIS、AMED、PsycINFOの検索。

4. 文献選択基準

言語、日付、記事形式、発行状況に関する制限は設けず、統合失調症患者を対象として標準的な治療とヨガの比較を行っているRCT (ランダム比較化試験) が対象。

5. データ収集・解析

統合失調症患者を対象として、ヨガと標準的な治療の比較を行っているすべてのRCTを検索対象とした。レビューチームが独立して試験を選択し、質のランク付けとデータ抽出を行った。バイナリアウトカムについて、RR (リスク比) およびCI (95%信頼区間) をintention-to-treatをベースに算出した。連続データについては、グループ間のMD (平均差) とCI (95%信頼区間) を算出した。混合効果モデル、固定効果モデルを使用し分析した。不均質性 (I²法) のデータ検証および対象試験のバイアスリスクを評価し、GRADE (Grading of Recommendations Assessment, Development and Evaluation) を用いて結果のサマリー表を作成した。

6. 主な結果

- ・8件の試験についてレビューを行った。すべてが短期 (6ヵ月以下) の結果であった。
- ・多くの項目で明確な差が認められ、ヨガグループに良好な結果が示された。ただし、それぞれの結果は1件の試験に基づくものであり、それら試験において早期のドロップアウトは除外されていた。差の認められた項目は、精神状態 (陽性陰性症状Positive and Negative Syndrome Scaleの改善、RCT 1件、83例、RR 0.70、95%CI 0.55～0.88、エビデンスとしての質は中程度)、社会的機能 (Social Occupational Functioning Scaleの改善、1件、83例、RR 0.88、95%CI 0.77～1、エビデンスとしての質は中程度)、QOL (36-Item Short Form Survey (SF-36) のQOLサブスケールの平均変化、1件、60例、MD 15.50、95%CI 4.27～26.73、エビデンスとしての質は低い)、早期のドロップアウト (8件、457例、RR 0.91、95%CI 0.6～1.37、エビデンスとしての質は中程度)。
- ・身体的健康の結果については、明確なグループ間の差は認められなかった (SF-36の身体的健康サブスケールの平均変化、1件、60例、MD : 6.60、95%CI : -2.44～15.64、エビデンスとしての質は低い)。
- ・有害な反応は1件の試験で報告されたが、両グループともに有害事象の発生は認められていない。

7. レビュアーの結論

標準的な治療と比較し、ヨガの優位性を示すいくつかのエビデンスが認められたが、結果の大半が1件の研究に基づくものであり、サンプルサイズが限られており、フォローアップの期間が短期である点を考慮して慎重に解釈されるべきである。

全体として、多くのアウトカムが報告されておらず、本レビューで示されたエビデンスの質は低～中等度であり、統合失調症のマネジメントのために、ヨガが標準的な治療法よりも優れていると述べるには極めて弱い。

原田 淳 岡 孝和 2016年9月28日